

連続変身の説話の系譜

——花咲翁を中心として——

Trace the Descent of the Tales
on a Chain of the Metamorphoses Back,
Focusing on the Grandfather-Cherry-Blossom's Case

沖 田 瑞 穂

要 旨

日本の昔話の「花咲翁」は、殺されて死体から有用植物を発生させるハイヌヴェレ型神話の要素を持つと同時に、中国の「狗耕田」、中国や台湾の「蛇むこ」などの説話とも同じ構造を持っており、古栽培民的要素と焼畑雑穀農耕に由来する要素の二層から成り立っているということが、古川のり子の研究により明らかにされている。本稿ではこの古川説に加えて、比較対象をルーマニアの「リンゴ姫」、インドの「ベル姫」、さらにはエジプトの「アヌブとバタ」の説話に広げ、これらの説話に共通した構造を抽出した。その特徴は、主人公が次々に変身する「連続変身」であり、おそらくエジプトのものが最も古く、エジプトから中国、日本へと伝播し、ルーマニアとインドの話はエジプトから中国への伝播の途中で分岐したものと考えられる。また、連続変身の本来の形は、「人間→動物→木→木製品→(灰)→再生」というものであったと推定される。

キーワード

花咲翁、連続変身、説話の伝播、ハイヌヴェレ型神話、焼畑雑穀農耕

誰もが知っている昔話の「花咲翁」。この話は、実は日本独自の話ではなく、様々な地域から複層的な影響を受けて成立した話であることが、古川のり子によって明らかにされている。本稿は、古川説に基づきながら

も、主人公が次々に変身する「連続変身」のモチーフに着目することで、花咲爺譚の源郷をさらに西に求める試みである。

1. 花咲爺譚の先行研究

まずは、花咲爺の標準的と思われる話を以下に挙げる。

花咲爺（福島県）

昔、爺と婆がいた。爺は山へ柴切りに行き、婆は川へ洗濯に行った。川上から大きな桃が流れてきたので、婆は爺に竹棒を持って来させ、桃を取った。家に帰って二つに割ってみると、かわいい犬が入っていた。その犬は茶碗で食べさせたら茶碗くらい、井で食べさせたら井くらい大きくなって、またたく間に大きな犬に成長した。爺が山へ行くこうとすると、犬が「おいも行きてえ、わんわん」と鳴く。どう言っても鳴くので連れて行くと、ずっと行ったところで、「ここ掘れワンワン、ここ掘れワンワン」と言う。爺が掘ってみると、小判や着物などの宝物がたくさん出てくる。爺はそれを家に持って帰り、婆と二人で着物を干したり小判を数えたりした。そこに隣の婆がやって来て、「どうしてこんな宝を取ってきた」と聞く。正直に教えてやると、隣の婆はむりやり犬に荷縄をつけて連れて帰った。隣の爺が犬を山へ連れて行き、「掘れ」とも言わないのに掘ったら、蜂の巣を掘り出してしまい、蜂に刺されて血だらけになって帰って来た。隣の婆は、爺が赤い着物を着て帰ってくると思って、自分の着物を焼いて、屋根の上に乗って待っていると、爺は着物を持って帰るところか、蜂に刺されて血だらけ。爺は怒って犬を殺して山に埋め、その上に松の木を植えてきた。いつまでも犬が帰ってこないの、爺が犬を返してもらいに行くと、「殺して埋めた」と言われ、爺は仕方なく犬の上

に植えられた松の木を掘って帰る。するとその松の木は見る間に大木に育つ。爺と婆はその松の木を切って、臼を作って米搗きをした。すると臼から小判や着物が出てきた。二人がまた喜んでいると、隣の婆がまたやって来て、どうやってその宝物を手に入れたのか聞いてくる。爺が正直に教えてやると、婆は無理やりに臼を背負って持って帰ってしまった。隣の爺と婆が臼で米搗きしてみると、糞が出てくる。怒った爺婆は臼を割って、かまどにくべてしまった。婆が臼を返してもらいにやってくると、「糞ばかり出すので腹が立って火にくべた」と言う。婆は臼を燃やした灰をもらって帰った。

爺は灰を持って枯れ木にのぼり、殿様の通りを待っていた。殿様がやって来ると、灰を枯れ木に撒いて花を咲かせてみせた。殿様はたいへん喜び、たくさんのほうびの品を与えた。それを聞きつけた隣の爺がまねをするが失敗し、殿様の家来に後ろ手を縛られて連れて行かれた¹⁾。

この花咲爺譚について、古川のり子が詳細な研究を行っている²⁾。それによると、花咲爺伝承を構成している主な話素は、①水界からの出現、②異常な成長、③犬が飼い主に富をもたらす、④犬の殺害と植物化生、⑤死体から生えた植物が飼い主に富をもたらす、⑥その木(臼)を焼き、灰をまくことによって富を得る、の六つである。そしてこれらの要素は、インドネシアのハイヌヴェレ神話と緊密な類似を示しているという。ハイヌヴェレ神話とは、生きている間は排泄物として貴重品を出し(神話本来の形ではおそらく食物を出した)、人々に殺されて死に、死体が細分されて地面に埋められ、そこから始めてイモが生じたという、農耕起源神話である。以下に、花咲爺譚とハイヌヴェレ神話の類似について、それぞれのモチーフごとに、古川説を確認していきたい。

①水界からの出現

現在われわれに知られている花咲爺の話の多くでは、富をもたらす犬がどこから来たかについて、伝えるのをわすれてしまっている。しかし各地に伝えられた話を見てみると、犬は水界と強い結びつきを持っていることが分かる。先に取り上げた福島県の話でも、犬は川から流れてきた桃の中に入っていた。東日本に分布する話では、犬は木の根、桃、重箱の中に入って川を流れてくることが多い。西日本では、爺が海や川、池などに薪を献じたお礼に、竜神から子犬を貰うという発端になっていることが多い。一方、ハイヌヴェレがそこから生まれることになるヤシの実は、池で水死したイノシシの死体についていた。

さらに、犬が入っている桃や木や箱を持って帰って、しばらく家の戸棚や臼などの中に入れておくというモチーフが、石川、宮城、長崎など日本の外縁部の地域に残っている。このモチーフは、ヤシの実は養父のアメタが持って帰り、サロング・パトラという特別な布に包んで戸棚に置いておいた、という話に繋がる可能性がある。

②異常な成長

花咲爺の犬は、爺婆に養われて急速に成長する。茶碗で食べさせたら茶碗くらい、井で食べさせたら井くらい。あるいは、飯を一杯食べさせると一歳、二杯食べさせると二歳、しまいには馬のようになる。これに対応する話として、ハイヌヴェレは誕生から三日後には結婚可能な娘、「ムルア」になっている。

③犬が飼い主に富をもたらす

犬が飼い主に富をもたらす方法は、主に三つある。まず一つ目は「発掘型」で、現在一般に知られている形である。犬が「ここ掘れワンワン」と

叫んで、善良な飼い主に大判小判を掘らせる。二つ目は「排泄型」である。北陸・中国・四国・九州・沖縄などの地方で採集された話では、犬はその身体から排泄物として黄金を産出している。

一般的に流布している発掘型よりも、排泄型の方が古いと思われる。排泄型の犬の場合、毎日一定量の食事を食べて富を排泄する例がよく見られるが、発掘型の犬の場合もこれと同様、一定量の食物を与えることが宝を掘らせる条件となっている例がある。

ハインツヴェレ神話はこの二つ目のタイプと対応する要素を持つ。ハインツヴェレは、身体からドラや中国製皿などの貴重品を排泄することによって養い親のアメタの家を裕福にした。

三つ目は「狩猟型」で、犬が狩猟をすることによって飼い主に富をもたらす。福島県の話では、爺と犬が狩に出て、「谷の鹿も駆けて来い、峯の鹿も駆けて来い」と叫んで鹿を持って帰る。意地悪な爺が犬を借りて山へ行くと、犬が「峯の蜂も飛んで来い、谷の蜂も飛んで来い」と叫ぶと蜂が来て刺される。この型に属する話は東北、山陰、九州などの周縁部に見られる。

④犬の殺害と植物化生

犬は飼い主に富をもたらすが、隣の爺には汚物やガラクタをもたらしたので、殺されて埋められ、その死体から植物が生えてくる。生えてくる植物は松・竹・榎などの樹木であることが多いが、蜜柑・橙・梨・柿などの果樹であることも多い。

ハインツヴェレは人々に殺され、死体を分断されて地面に埋められ、そこから最初の芋などが生じる。

⑤死体から生えた植物が、飼い主に富をもたらす

富の入手方法は主に二つあり、良く知られている、木を臼に加工して富を得るという話の他に、木の実りとして富を得るという場合もある。前者の方が一般に流布しているが、後者の方が古い形であろうと思われる。死体化生した植物から直接富を得たあと、ここまでで完結して次の灰撒きの結末を持たない話もかなり多く見られる。

ハイヌヴェレの場合は、埋められた死体からイモが発生し、農耕の起源となる。

⑥その木（臼）を焼き、灰を撒くことによって富を得る

富の入手方法として、二つのタイプがある。「雁とり型」は主に東北地方に集中して見られ、そのほとんどが、犬による富の入手方法として狩猟型に属し、全体として狩猟文化的色彩の強い話になっている。二つ目はよく知られている「花咲かせ型」である。

この部分に関しては、ハイヌヴェレ神話には対応する要素がない。灰を撒くことで富を得るという要素には、焼畑雑穀農耕の反映が認められるという。焼畑雑穀農耕では、山の木々を切り倒して焼き、その灰を唯一の肥料にして作物を育成する。土に含まれている有機質が灰にされることで燐酸やカリに化学変化し、肥料効果を表すと言われている。

花咲爺伝承で、爺は灰をどのような場所に撒いているのかを見てみると、ほとんどが、「屋根の上から雁に向かって撒いた」とか、「山に行き木に登って枯れ木に撒いた」など、曖昧な表現になっている。しかし、はっきりと畑に灰を撒いたとしている例もあり、その場合は、実際の焼畑雑穀農耕を反映した灰の使用法として、最も自然と思われるという。

同時に灰は、ハイヌヴェレ型神話の母体となった古栽培民の文化においても、重要な意味を持っていた。たとえばニューギニアのキワイ族では、

ハイヌヴェレ神話の繰り返しの意味を持つ儀礼において、犠牲の肉の一部を畑とココヤシの栽培地に埋めたり、焼いて灰にしてヤシの幹にすりこんだ。つまり神話の中でハイヌヴェレの肉片からイモが生じたように、灰も、肉片と同様に豊穣をもたらすものとして扱われていたのである。

このように花咲爺譚はハイヌヴェレ神話と密接な類似を示しているが、その一方で、花咲爺譚に全体的構造において非常に良く似た話が、焼畑雑穀農耕を営む照葉樹林帯において見出すことができるという。たとえば、中国に広く分布する「狗耕田」の話がその一つである。

狗耕田（中国）

死んだ親の遺産分けになって、ずるがしこく貪欲な兄は家屋敷から肥えた田畑、牛や馬など、めぼしいものはあらかじめ取り、実直な弟には一匹の犬とわずかばかりの荒れた山地を分け与えて分家させる。ところがある日、その犬が耕作に使う牛や馬がなくて困っている主人に申し出て、自分の小さい体に重たい犁を無理につけさせ、山地の開墾を始めると、驚いたことに牛馬もかなわぬほどの神通力を発揮して、たちまち耕し、おかげで豊かな収穫に恵まれて、弟は大金持ちとなった。これを知った欲深い兄は無理やりその犬を弟から借り、犁を引かせるが、犬は言うことを聞かない。兄は怒って犬を殺してしまう。

犬を埋めたところから竹が生える。弟は犬の形見だといって、その竹で鳥かごをつくって吊ると、たちまち鳥の卵でいっぱいになる。兄はこれを見て、またその鳥かごを借りて軒下に吊るし、覗いてみると、籠の中は雁の糞でいっぱい。怒った兄は竹かごを踏み潰す。弟はそれをもたらってきて薪の代りに炉にくべる。そして犬の形見の灰を肥料として畑にまくと、豊作に恵まれた。

次に挙げる台湾と中国苗族に伝わる「蛇むこ」の話も、やはり全体的構造において花咲翁に似ているという。それぞれ、以下のような話である。

へびむこ
蛇郎君 (台湾)

むかし、李遠月という人がいた。彼には二人の娘がいて、二人とも花が好きで、いつも父に花を買う事をねだるので、父はこっそり同じ町の金持ちの庭に忍びこんで、きれいな花を摘んで帰るようになった。ある夜、李遠月が庭でこっそり花を摘んでいると、一人の立派な若者が近くに立っていて、「どうしてこの家に花を摘みに来るのか？」と聞いてくる。李は正直に事情を打ち明け、地面に手をつけて謝ったが、若者は許そうとしない。仕方なく、二人の娘のうち一人を嫁にあげますと言うと、それなら許そうと言って、李を家に帰らせる。李は後悔のあまりしばらく塞ぎ込んだが、とうとう娘たちに本当のことを話すと、二番目の娘は嫁に行くのを嫌がるが、上の娘は快く承知する。一カ月がたち、例の若者がお供を連れて嫁を迎えにやってくる。その夜一行は李の家に泊まったが、おかしなことに婿とその一行は寝台の代わりに物干しの竹を用意するように言う。李は不思議に思いながら、部屋の中に数本の竹をたてかけておく。夜中に、李は戸の隙間から覗いてみてびっくり仰天。婿はいつの間にか大蛇になってとぐろを巻いており、お供の者たちも蛇になって竹竿に巻き付いている。翌朝、李は昨晚見たことを二人の娘に話して聞かせるが、上の娘はそれでもあきらめて嫁に行くと言う。その日、上の娘は蛇むこ一行とともに隣村に帰る。李は心配でたまらないので一緒について行った。婿の家は大変立派で、李は大いに歓迎され、たくさんの土産をもらって帰った。家に帰ると李は、二番目の娘に蛇むこの豪華な生活を話して聞かせた。それを羨んだ妹は、何日かして姉の家遊びに行った。蛇

むこは留守だったが、姉はたくさんごちそうを作って妹を歓迎した。姉の豪華な暮らしぶりを見て、妬ましくなった妹は、毒薬を酒の中に入れて姉を毒殺し、死体を家の裏にある小川のほとりに埋めて、姉になりすまして蛇むこの妻となって、その豪華な邸宅に住みついた。

何か月か後、一羽の雀が庭の木の上に飛んできて、声高く妹の罪をさえずって歌っている。妹は怒ってその雀を捕まえて殺し、裏庭の井戸端に埋めた。何日かすると、その土の上に竹の芽が出て、三、四年後には一丈あまりの高さに伸びた。妹が井戸の水を汲む時に、その竹の小枝や葉が邪魔になるので、妹はその竹を切らせて、竹椅子の一つ作ってもらった。ところが妹がその竹椅子に座ると必ずすぐにひっくり返ってしまうのに、蛇むこが座ると何ともない。妹はおそろしくなってその椅子を叩き潰して、かまどの中に放り込んで焼いてしまった。

翌朝、隣りのおばあさんが灰をもらいに来た。おばあさんがかまどの口をあけると、灰の中に餅が一つあるのを見つけて、黙ってその温かい餅を灰といっしょに家に持ち帰った。おばあさんはその餅を息子に食べさせようと思って、息子が帰ってくるまで、布団の中に入れて温めておいた。息子が帰って来たので布団をあけてみると、餅が女の赤ん坊に変わっている。神様からの授かりものだと思っておばあさんは赤ん坊を大切に育てた。

十何年か経ち、赤ん坊はきれいな娘になった。ある日、蛇むこがその家の庭で娘の顔を見たとき、以前の妻にそっくりなので驚いて尋ねると、娘は「実は私こそあなたの妻で、妹に毒殺されたのですが、雀に化けると、また殺されたので、竹に変わりました。そしたらかまどで焼かれたので、餅に化けました。その後赤ん坊に生まれ変わり、おばあさんに育てられて、ようやくあなたと再会できたのです」と答

えた。蛇むこはおばあさんの許しを得て本当の妻を家に連れて帰った。今までの悪事が全て暴露された妹は、恥ずかしさのあまり毒を飲んで自殺した。蛇むこ妻は末永く幸福に暮した³⁾。

ヘビむことタニシ女房 (中国 苗族)

むかしあるところに、おじいさんと二人の娘がいた。姉はアヤン、妹はアイーといった。ある日おじいさんが、誰でも焼畑の手伝いをしてくれたものに娘を嫁にやると言ったところ、蛇と猿が名乗りをあげ、焼畑の手伝いをした。おじいさんは蛇と猿を家の戸のところまで連れて帰り、娘たちに婿選びをさせた。いじわるな姉アヤンは、猿のほうがまずまず人に近いだろうと考え、猿を婿に選び、優しい妹のアイーは、仕方なくヘビを婿に迎えた。翌日、二人の娘はおじいさんに別れを告げ、めいめいの夫について行った。アイーは、ヘビについて行ったが、日が沈むころになると、ヘビは美しい若者の姿に変わり、二人は仲睦まじく語らいながら夫の家に着いた。たちまち一年がたち、かわいい赤子にも恵まれ、二人は楽しい毎日を過ごしていた。

一方、猿について行った姉アヤンはどうだったかという、おじいさんの家を出た日から宿なし者で、よそさまの家から食べ物盗んできては空腹を満たし、冬になると山のほらあなにもぐりこんでじっとしているという暮らしだった。こうして姉妹が結婚してから二年が経った。

ある日アヤンは、アイーとヘビむこの幸せな生活を小耳にはさんで、くやしさをあまり悪知恵を働かせ、アイーを川に突き落とし、自分がアイーの服を着てなりすまし、赤ん坊をおぶって、ヘビむこの帰りを待った。ヘビむこは最初はいぶかしんだが、アヤンとアイーはもともと瓜二つだったので、ヘビむこにもはっきりと見分けることがで

きなかった。こうして何年か過ぎ、アヤンも子どもを一人産んだ。

ところで川に突き落とされたアイーは、死んではいなかった。川底で竜宮の優しい女中に助けられ、そのまま竜宮で女中勤めをしていた。やがてアイーは竜宮を出ると、小鳥に姿を変えてあちこち飛び回り、夫を探し出した。アイーの鳥はヘビむこの家の軒下をひらりひらりと飛び回り、ヘビむこが顔を洗うと美しい歌をさえずって聞かせた。子どもが鼻水をたらすと、小鳥は飛んできてきれいなめてやった。けれどもアヤンが顔を洗うと、小鳥はきつい声ではっきりと、「アヤンの汚いその心／洗ったところで汚いし／洗わなくても汚いさ」と歌った。アヤンはカッとなって、石を投げて小鳥を殺してしまった。ヘビむこはかわいそうに思って小鳥を埋めてやった。何日かたつと、小鳥を埋めたところから、木が生えて青々と茂った。涼むのものにもってこいというわけで、ヘビむこ父子がその木の下で涼んでみると、涼しいばかりか、蚊が一匹もよりつかない。アヤンがその木陰で涼んでみると、涼しいどころか、大汗が吹き出し、体中に蚊がたかってくる。アヤンはカッとなり、その木を切り倒してしまった。ヘビむこは、その木の幹がまっすぐなので、洗濯棒を作った。アヤンがこの洗濯棒で洗濯をすると、夫や子どもの着物は、叩くときれいに汚れが落ちるのに、アヤンの着物は、叩けば叩くほど汚れがひどくなる。アヤンはカッとなって洗濯棒を焼いて、その灰を田んぼにまいてしまった。

灰になってもアイーは夫や子どもと別れなくなかった。何日もたたないうちに、アイーは今度はきれいなタニシに姿を変えた。田んぼを耕していたヘビむこは、このタニシをみつけて、きれいだと思って家に持って帰り、水がめの中に入れておいた。それから後、みんなが留守の時に、アイーは水がめから出てきて、鏡に向かって髪を梳かし、

夫の着物をつくろったり、子どもの着物を洗ってやったりしていた。ヘビむこは不思議なことだと思っていたが、今の妻はうさんくさいので、この不思議なことを自分の胸におさめて、一言も話さなかった。

ある日、家のものみんながトウモロコシ畑に出ていた時、ヘビむこは肥料を取りに帰ると言って一人で家に戻り、戸のすきまからこっそり部屋の中をうかがった。すると一人の女が水がめの中から出てきた。見るとそれはいとしい妻のアイーではないか。ヘビむこはわれを忘れてすぐさま戸を押し開き、アイーをひしと抱きしめた。こうして仲の良い夫婦は再会することができた。その時激しい雨が降り、たちまち大川となり、アヤンをのみこんでしまった。ヘビむことアイーは、二人の子どもとともに、仲むつまじく、幸せな生活を送った⁴⁾。

これらの話は、発端部分は異なるものの、犬や小鳥の殺害以下の展開が、花咲爺の犬の殺害以下の展開と酷似している。犬が、木→臼→灰へと転生し、それに伴い善者には富を、妨害者には破滅をもたらしている展開が、狗または小鳥が、木→籠／洗濯棒／椅子→灰へと転生し、妨害者を破滅される展開と正確に対応しているという。

以上のような分析をもとに古川は、花咲爺伝承は二つの層からなっていると言く。第一の層は果樹やイモ類を主作物とする古栽培民文化を基盤とする話素、第二の層は、焼畑雑穀栽培文化（照葉樹林文化）を基盤とする話素である。つまり、花咲爺伝承は、最も基本的な形においては、古栽培民の典型的なハイヌヴェレ神話と正確に対応する。そしてそれより新しいと思われる形において、照葉樹林帯の焼畑雑穀栽培文化の話とよく対応しているという。

2. ルーマニアとインドの連続変身説話

古川のり子は花咲爺譚の起源の一部を中国に求めているが、花咲爺の源郷は中国までで止まるわけではない可能性がある。これらの説話の「連続的な変身」のモチーフに着目すると、類似の話はさらに西にも認められる。そのことを、篠田知和基は以下のように述べている⁵⁾。

犬自体が主人公となる「花咲爺」のような話はすくないが、リュゼルの「トレギエの王子」では王子が馬になり、馬を殺してその一片を日にあてるとそこからサクランボの木がはえ、その木をきりたおしても、サクランボを日にあてると、青い鳥になり、その鳥が魔法の剣にとまると、もとの王子になる。ルーマニアの話では子どもを殺すと金のリンゴの木がはえ、それを切ってベッドをつくると、ベッドが口をきく。金のリンゴを食べた羊は金の子羊を生み、それを殺して内臓を川であらうと、それが流れて金の子どもになる。連続的な変身はインドの物語ではなじみのものだが、犬を殺してうめると木がはえ、それでウスを作ると金が湧き、臼を燃してその灰をまくと枯れ木に花がさくのと、この二つの話はつながっている。

ここで簡単に説明されているルーマニアの話を、篠田は別の箇所でもう少し詳細に紹介している⁶⁾。

リンゴ姫（ルーマニア）

ルーマニアで、あるとき一人の女が金の双子をうむ。召し使いの女がそれを殺し、犬ですりかえる。女は犬をうんだとして追い出される。子供を埋めたところから金の林檎の木が生え、いまや後妻に居直った

召し使いがそれを切ってベッドをつくらせる。そのベッドが幼児殺害の物語を語り出す。女はそれを燃やさせる。その間に金の林檎を食べた羊が金の子羊をうむ。女がそれも殺させるが、その内臓を川で洗っていると、一部が流れてゆき、見る間に大きくなって、向こう岸についたときはそこから金の子供がうまれる。これが父親のところへやってきて敵打ちをする。

また、篠田は「連続的な変身はインドの物語ではなじみのものである」と述べているが、そのインドの物語とはたとえば以下のようなものである。

ベル姫（インド）

ある国に七人の息子を持つ王様が住んでいた。このうち六人の王子は結婚していたが、七番目の一番若い王子は結婚しようとしなかった。そればかりか彼は、六人の義姉たちを嫌っていた。ある日この王子の態度に腹を立てた義姉たちは、彼をあざけて、「あなたはきっと、ベル姫と結婚するわ」と言った。王子は、ベル姫を探す旅に出かけた。

馬に乗って六カ月の旅を続けた後、王子は大きなジャングルに行きつき、眠っている托鉢僧のところへ来た。王子はこの托鉢僧の助けを得て、大変な苦勞のすえ、妖精の国にあるベルの木からベルの果実を取ってきた。このベルの果実の中にベル姫がいるのであった。托鉢僧は別れ際に王子にこう言って注意を促した。「あなたが探しに来たベル姫は、その果物の中にいる。しかし、決して途中で果物を開けてはならない。あなたの父母とともに、父の家に入るまで開けるのを待ちなさい。もし途中で開けると、良くないことが起こるだろう。」

王子は六カ月の間、馬で旅を続けた。王子は父の国へ着き、父の庭園に着いた。王子は父の庭にある井戸のそばに座り、顔と手を洗って

水を飲んでから、考えた。「私は今父の国の庭園にいる。今ここで果物を開けても、悪いことなど起こらないだろう。」王子は、托鉢僧があれほど注意したにもかかわらず、果物を割って開けた。そこから、たいへん美しい少女が現れた。今までに見たことのなかったほど美しい少女であった。あまりの美しさに、少女の姿を見た時、王子は気絶してしまった。少女は王子をあおいだり、顔に水をかけたりした。王子は目を覚ますと、「私は長い旅を続けてきたので疲れている。少しの間眠りたい。その後で、父の宮殿へ一緒に行こう」と言うと、眠りについた。

そこに、一人の醜い女が水を汲みにやって来た。王子とその側にいる美しい少女を見ると、女は少女を殺して自分が王子の妻になりすまそうと決心し、少女の側にやって来ると、「お互いの服を交換しませんか」と言った。少女は別に害はないと思って言うとおりにした。次に宝石をくださいと言われたので、これも言うとおりにした。すると女は少女を散歩に誘った。そして、少女が井戸の中をのぞこうとして身を傾けた時、女は少女を井戸の中に突き落とす。

それから悪い女は、少女がしていたように眠っている王子の側に行って座った。王子は目を覚ますと、ベル姫の代わりに、この醜い女を見てたいへん驚いた。女は「あなたの国の悪い空気のために、私は醜くなってしまったのです」と言った。王子は彼女を恥に思い、後悔したが、仕方がないと思って彼女を父の宮殿へ連れ帰り、結婚した。

一方、ベル姫は井戸の中で死んではいなかった。ピンク色の美しい蓮の花に変わっていた。一人の男がこの花を取ろうとしたが、花は浮いて遠くへいってしまう。誰もが花を取ろうとしたが、取ることはできなかった。王様や六人の王子も取れなかったが、末の王子が花に手を伸ばすと、花は彼の手の中に浮いてきた。王子はその花を持ち帰

り、あの悪い妻に見せて自慢した。女は、その花がベル姫であることに気づいていたので、王子がいない間に、その花を取って細かく引き裂き、庭の遠くの方へ捨ててしまった。

二、三日たつと、蓮の花が捨てられた場所からベルの木が生えてきて、そこに大きなベルの実が一つ成った。人々はこぞってこの実を取ろうとしたが、果実はいつも手の届かないところに行ってしまうと、誰にも取ることはできなかった。王様や六人の王子にも取ることができなかったが、末の王子が取りに行くと、果実は王子の手の中に入った。王子はそれを妻のところへ持って行って自慢し、部屋のテーブルの上に置いておいた。悪い女にはその中にベル姫がいることが分かっていた。王子が行ってしまうと、女は果実を取って庭に放り投げた。夜になると果実は二つに割れて、中から女の赤ん坊が出てきた。子どものない庭師がその赤ん坊を見つけ、妻とともに大切に育てた。庭師の娘はすくすく大きくなった。彼女は今まで誰も見たことがないほど美しかった。この娘の評判を聞いた悪い女は、その娘がベル姫であることを悟り、どうやって殺そうかと考えていた。ある日悪い女は、自分の牝牛が庭師の娘にひどい扱いを受けたと言って、庭師の娘を殺すように王子に言った。王子は庭師の娘を殺させることにした。庭師の娘はジャングルの中へ連れて行かれたが、召し使いたちは、この娘があまりに美しいので、殺すことができなかった。すると娘は、自ら手にナイフを持って、自分の二つの目を、くり抜いた。すると、一つの目は一羽のインコになり、もう一つの目は、一羽の九官鳥になった。彼女が、自分の心臓を切って取り出すと、それは大きな溜池になった。彼女の身体は、素晴らしい宮殿と、庭園になった。彼女の両腕と両足は、ベランダの屋根を支える柱となった。彼女の頭は、宮殿の頂上にある円型の屋根となった。召し使いたちはこれらのことすべ

てを見ていたが、大変おそれて、誰にもこのことを話さなかった。

それからしばらくして、王子は狩りに出かけ、夕方近くに、その宮殿のところにやって来た。王子はその素晴らしい宮殿を見て回った後、ベランダで眠った。するとそこにインコと九官鳥が飛んできて、おしゃべりを始めた。王様に七人の王子がいること、そのうち六人は結婚しているが、七人目の王子は結婚しながら、義姉たちを嫌っていたことを話した。王子は大変びっくりして父の宮殿に帰ったが、妻に何を聞かれても黙っていた。二日目、インコと九官鳥は王子がベルの果実を取りに行ったことを話した。同じことが何日か続いた。五日目の夜、インコと九官鳥は、悪い女がベル姫を殺し、ベル姫が蓮になり、次に赤ん坊になり、成長するとまた殺されて、今度は宮殿と溜池になったことを話した。王子は宮殿の地下に降りて行き、そこでベル姫を見つけた。王子はベル姫に、父の宮殿に戻って準備をしてから必ず迎えに来ますと約束すると、父のもとへ戻り、すべてを話して聞かせた。そしてまず、あの悪い女を殺すことにした。女はジャングルで召し使いに殺された。それから数日後、王子は父母と、兄たちと義姉たちとともにあの宮殿へ行き、ベル姫と結婚した⁷⁾。

明らかにこのベル姫説話の同系と考えられる話が、チベットにある。ミカン姫の話である。ミカン姫は、彼女と瓜二つに化けた妖怪に殺されるが、その後、蓮の花→灰→クルミの木→灰／クルミの実→娘→(殺害)→灰→宮殿→娘、という変身を繰り返す⁸⁾。

3. エジプトのバタ説話

連続変身の話は、インドよりさらに西にも認められる。エジプトの、アヌブとバタの兄弟の話である。

バタ説話（エジプト）

昔、エジプトにアヌブとバタという名の兄弟がいた。兄のアヌブは家を持っていて、妻もいた。弟のバタは兄の家に住み、兄のために毎日一生懸命に働いていた。バタは動物たちの言葉を理解することができた。バタが牛を連れ出すと、牛たちが「どこそこの草がよい」と教えてくれるので、牛たちはよく育ち、子牛をたくさん産んだ。ある時兄弟が畑仕事をしていると、畑にまく種がなくなったので、バタが一人で家に取りに帰った。家にはアヌブの妻がいて、バタの姿を見ると、誘惑しようとした。バタはきっぱりと断って、畑に戻った。兄嫁は、バタがアヌブに告げ口をするのではないかと恐れ、自分がバタに誘惑されたように見せかけて、痛めつけられたふりをして横たわっていた。妻にすっかりだまされたアヌブは、バタが妻を誘惑しようとして痛めつけたと思い込み、槍を持って小屋の後ろに立ち、バタが来たら刺してやろうと思っていた。

バタは作物を運んで帰りかけていたが、先頭にいた牛が、兄が小屋の後ろに隠れていることを教えた。バタは逃げだし、アヌブは弟を追った。バタは走りながら太陽神に祈って助けを求めた。太陽神は兄弟の間に大きな池を現した。その池にはワニがたくさんいたので、アヌブはそれ以上バタを追うことはできなかった。翌朝、バタは本当のことを太陽神の前で誓って話したので、アヌブは事実を知り、弟に詫びようとしたが、池が阻んでいたのでどうすることもできなかった。バタは兄に言った。「あなたは家に戻って家畜の面倒を見てください。私は〈松の谷〉へ行きます。一つだけ、あなたにお願いがあります。私に何か起こったことを知ったら、私のところへ来ててください。私は心臓を取り出し、松の花のところへ置いておきますから、これを探してください。見つけるのに七年かかるでしょう。でも見つかるで

しょう。心臓を真水の中に入れて、私は生き返ります。もし誰かがあなたにビールの壺を渡し、そのときそれがこぼれたら、私に何かがおこったしるしです。すぐに私のところに来てください。」こうして弟は〈松の谷〉へ行った。兄は妻を罰し、弟のことを思って悲しんだ。

それから年月が過ぎ去った。バタは昼間は砂漠で狩りをし、夕方には〈松の谷〉に戻ってきて、心臓を松の花のかげにおいて眠った。神々はバタに妻が必要だと思い、フヌム神がバタのために妻を創り出した。この女は大変美しかったが、あまりいい妻ではなかった。女神たちは、「この女は刑罰を受けて死ぬことになるだろう」と予言した。バタは妻を愛し、心臓のこともすべて打ち明けた。

またも年月がたった。ある時バタの妻の髪の毛が波に乗ってエジプトへ行き、ファラオの服についた。ファラオは髪の毛を調べさせ、それがバタの妻のもので、大変美しい女であることを知ると、ファラオはバタの妻を連れて来させた。バタの妻もファラオのお気に入りになったことを喜び、バタの心臓の秘密をファラオに教えた。ファラオは〈松の谷〉に兵士を送り込み、松を切り倒させた。松の花のところに置かれていたバタの心臓は地面に落ち、バタは家の中の寝台の上で死んだようになってしまった。

兄アヌブは自分の家にいたが、召し使いが差し出したビールがビール壺から溢れるのを見て、弟に何か起こったことを知り、武器を持って〈松の谷〉に出かけた。アヌブは弟が寝台の上で死んだようになってのを見た。アヌブは何年もかけて松の谷のあたりを探し、ようやく弟の心臓を見つけた。アヌブはコップに水を注ぎ、そこにバタの心臓を入れると、バタの身体が動き始め、バタの心臓の入っているコップを、アヌブがバタに飲ませると、バタはすっかり元気になった。兄弟は抱き合って再会を喜んだ。それからバタはアヌブに言っ

た。「私はこれから大きな雄牛になりますので、エジプトへ連れて行ってください。ファラオはあなたにたくさんの報酬をくださるでしょうから、それを持って国に戻ってください。」

翌日、バタは大きな雄牛になった。アヌブはこれに乗ってエジプトへ行った。ファラオはその牛が不思議な色をしているのを見て感嘆し、それを宮殿におき、アヌブにたくさんの銀と金を与えた。アヌブは国へ帰った。

それから多くの日が過ぎた。ある時バタの雄牛は、ファラオのお気に入りとなっていたもとのバタの妻に向かって、「私だよ。まだ生きているのだよ」と言った。女が「あなたはだれ」というので「バタだ」と答えると、女はひどく恐れて、ファラオに「あの大きな雄牛の肝臓を食べたいのです」と願い、雄牛を殺させた。

その雄牛が殺された時、二滴の血が王宮の門の前に落ち、そこから二本のシュブの樹が生え、夜の間到大木になった。

それからまたも多くの日が過ぎ、ファラオはバタの妻だった女を連れてシュブの大木を見学に来た。そのシュブの大木のそばに来た時、木の中からバタの声がして、女に向かって「私はバタだ。おまえはまたも悪いことをしたね。でもわたしは生きているよ」と言った。女は恐ろしくなって、ファラオに頼み、シュブの大木を切り倒させ、家具を作らせた。家具職人が大木を削っている時、その切りくずが飛んで、女の口の中に入った。すると女はすぐに身ごもった。やがて女は男の子を出産した。ファラオも国中の人々も喜び、この子にクシュという名をつけ、後継ぎの王子とした。またも多くの日が過ぎ、ファラオは亡くなった。

バタの生まれ変わりである王子は、新たなファラオとなり、家来たちを集めて、自分の身に起こったことを全て話して聞かせた。彼の妻

だった女は裁きののち、罰せられた。バタは兄アヌブを呼び、自分の後継ぎとした。

こうしてバタはエジプトを統治し、亡くなったのちにはアヌブがその後を継いだ⁹⁾。

4. 連続変身の説話の系譜

以上に、日本、台湾、中国、ルーマニア、インド、チベット、エジプトの連続変身説話を取り上げてきた。それぞれの連続変身の順序をまとめてみると、次のようになる。

〈日本 花咲爺〉

犬→(殺害)→松の木→臼→灰→(枯れ木に花が咲く)

〈中国 狗耕田〉

犬→(殺害)→竹→竹籠→灰→(豊作)

〈台湾 ^{へびむこ} 蛇郎君〉

娘→(殺害)→雀→(殺害)→竹→竹椅子→灰→餅→赤ん坊→娘に成長

〈中国 へびむことタニシ女房〉

娘→(殺害)→鳥→(殺害)→木→洗濯棒→灰→(畑にまかれる)→タニシ→娘に戻る

〈ルーマニア リンゴ姫〉

金の双子→(殺害)→金の林檎の木→ベッド→灰/金の林檎→羊が食べる→金の子羊→(殺害)→子羊の内臓を洗う→金の子ども(連続変身の流れに切れ目がある)

〈インド ベル姫〉

果実→ベル姫→(殺害)→蓮→ベルの木→果実→赤ん坊→娘→インコ・九官鳥・溜池・宮殿・柱・屋根→ベル姫¹⁰⁾

〈チベット ミカン姫〉

娘→(殺害)→蓮の花→灰→クルミの木→灰／クルミの実→娘→(殺害)
→灰→宮殿→娘(連続変身の流れに切れ目がある)

〈エジプト バタ説話〉

男→雄牛→木→家具→赤子→男

こうして見てみると、連続変身モチーフの原型と思われる形は、以下の
ようなものであると想定することができそうである。

人間→動物→木→木製品→(焼かれる→灰)→再生

	人間	動物	木	木製品	(灰)	再生
花咲翁 (日本)	—	犬	松の木	白	(灰)	(花が咲く)
狗耕田 (中国)	—	犬	竹	鳥籠	(灰)	(豊作)
蛇郎君 (台湾)	娘	鳥	竹	竹の椅子	(灰)	娘
へびむこと タニシ女房 (中国)	娘	鳥	木	洗濯棒	(灰)	娘
リング姫 (ルーマニア)	金の双子	[羊]	金のリング ゴの木	ベッド	(灰)	金の子ど も
ベル姫 (インド)	娘	[インコと 九官鳥]	ベルの木	宮殿と柱	—	娘
ミカン姫 (チベット)	娘	—	クルミの 木	宮殿	(灰)	娘
バタ (エジプト)	男	雄牛	木	家具	—	男

※左から右に物語の順番となっているが、[] の部分は物語の順番通りではない。

焼かれて灰になる要素は、エジプトの説話には認められず、中国において焼畑雑穀農耕の影響で取り入れられたモチーフである可能性が考えられる。

一応これを原型と考えると、以下のような表を得ることができる。

これほどの類似がある以上、これらの神話が偶然に個別的に発生したものと考えられない。やはり何らかの系統的関連があるのであろう。想定される伝播経路として、ここではエジプト起源で西から東への流れを提示する。根拠はやや薄弱であるが、エジプトの話が最もシンプルな連続変身の形態を取っているように思われるからである。

エジプトから中国、日本へという一つの太い伝播経路があり、ルーマニアとインド及びチベットの話はエジプトから中国への経路の途中で分岐したのではないかと考える。ルーマニアとインド、チベットの話は、連続変身の流れに中断があり、複雑な形態を取っているため、エジプトの影響のもと、独自の発展を遂げたものと考えられそうである。

花咲翁、狗耕田では連続変身の最後における犬の再生は語られておらず、豊作のモチーフに変化している。元来は、人間が様々な連続変身を行い、最後に元の人間に戻るという話であったと思われる。

連続変身モチーフが、中国において焼畑雑穀農耕と結びつき、さらに日本において縄文中期にはすでに日本に流入していたと思われるハイヌヴェレ型神話と結びついて、現在見られるような花咲翁譚が成立したものと考えられるのではないだろうか。

注

- 1) 稲田浩二編『日本の昔話』(上)ちくま学芸文庫、1999年、373-378頁。
- 2) 吉田敦彦『縄文土偶の神話学』名著刊行会、1986年 所収 古川のり子「付説 花咲翁伝承について」195-254頁。
- 3) 施翠峰『台湾の昔話』世界民間文芸叢書、三弥井書店、1977年、67-74頁。
- 4) 村松一弥訳『苗族民話集—中国の口承文芸2』東洋文庫、1974年、153-

166頁。

- 5) 篠田知和基『魔女と鬼神の神話学』樂瑯書院, 2012年, 352-353頁。
- 6) 篠田知和基「桃太郎・金太郎・踵太郎」(『アジア遊学 古今東西のおさな神』勉誠出版, 2006年) 178頁。
- 7) M・S・H・ストークス原著, アダムス保子訳『インドの民話』アジアの民話8, 大日本絵画, 1979年, 257-276頁。
- 8) 村松一弥編『中国の民話』(上), 毎日新聞社, 1972年, 222-239頁。
- 9) 矢島文夫『エジプトの神話』ちくま文庫, 1997年, 89-103頁。
- 10) ベル姫の身体から宮殿の諸要素が生じる話は, 世界の構成要素が原初の巨人の死体から生じたとする, 世界巨人型神話との関連が考えられる。